

# 『牧歌』 訳 注

## — 第 一 歌 —

野 村 圭 介

すべてのラテン的教養は『牧歌』第一歌を読むことで始まった<sup>補注1</sup>。

E. R. クルチウス

プブリウス・ウェルギリウス・マロ Publius Vergilius Maro (70 B.C.～19 B.C.)の『牧歌』Bucolica (『詩選』Eclogaeとも呼ばれる)に収められた10篇の詩は、ほぼ紀元前42～37年頃作られたものと推定されるが、各篇が制作順に配列されているとは言い難い。前40年の後半に書かれたと考えられる第一歌は、フィリッピの戦い(42 B.C.)の後の、アントニウス Antonius、レピドゥス Lepidus、オクタウィアヌス Octavianus の第二次三頭政治による土地没収を時代背景とする。退役兵に定住地を与えるために強行された土地接収はイタリア全土に及んだが、とりわけウェルギリウスの出身地北イタリアのガリア・キサルピアでは多くの農地が没収の憂き目にあった。「ああ不幸なクレモナに余りにも近いマントゥアよ」Mantua uae miserae nimium uicina Cremonae と詩人自ら『牧歌』第九で歌っている。

第一歌は、6歩格 hexameter 83行からなる対話体の詩である。登場人物は二人の牧人。常ならぬ僥倖により没収を免れ、平和な牧歌的世界を享受する

Tityrus ティテュルスと、父祖の土地を奪われ山羊の群をつれて泣く泣く故郷をあとにする、牧歌に別れを告げる Meliboeus メリボエウス。詩はこの相反する二人の運命をあふれんばかりの詩情をもって、時に痛切に、時にしみじみと歌い上げる。以下は、遅れて来た latiniste の『牧歌』精読の試みである。精読の最良の手段としての訳注の試みである。日暮れて道遠しの感愈々深いのであるが、せめてウェルギリウスだけは、自分なりにしっかりと読んでおきたいと思っている。なお、ラテン語本文は、E. de Saint-Denis 編の通称 Budé 版に依拠した。

## MELIBOEVUS

Tityre, tu patulae recubans sub tegmine fagi  
 siluestrem tenui musam meditaris auena;  
 nos patriae finis et dulcia linquimus arua;  
 nos patriam fugimus; tu, Tityre, lentus in umbra,  
 formosam resonare doces Amaryllida siluas. 5

## メリボエウス

ティテュルス、君は枝を拡げたブナの木陰に身を横たえ、  
 か細い葦笛で森の調べを<sup>かな</sup>奏でているんだね。  
 ぼくらは故里に、いとしい田園に別れを告げる。  
 ぼくらは故郷<sup>くこ</sup>を追われる。ティテュルス、君は木陰に憩い  
 森に教えている、「美しいアマリユリス」といくども木魂をひびかせるように。

## TITYRVS

O Meliboee, deus nobis haec otia fecit:  
 namque erit ille mihi semper deus; illius aram  
 saepe tener nostris ab ouilibus imbuet agnus.  
 Ille meas errare boues, ut cernis, et ipsum  
 ludere quae uellem calamo permisit agresti. 10

## ティテュルス

メリボエウスよ、神様がこのような閑暇をお恵み下さった。  
 彼の方こそわが永遠の神。彼の方の祭壇を  
 僕の小屋の柔らかい子羊の血がいくども潤すことだろう。  
 彼の方のおかげで、ごらん、牛たちは気ままに野をさまよい、  
 僕もまた思いのままに葦笛を吹くことができるのだ。

## MELIBOEVVS

Non equidem inuideo, miror magis: undique totis  
 usque adeo turbatur agris! En ipse capellas  
 protinus aeger ago: hanc etiam uix, Tityre, duco:  
 hic inter densas corylos modo namque gemellos,  
 spem gregis, a! silice in nuda conixa reliquit. 15  
 Saepe malum hoc nobis, si mens non laeua fuisset,

de caelo tactas memini praedicere quercus.

Sed tamen iste deus qui sit, da, Tityre, nobis.

メリボエウス

いや、羨ましいというより、驚きなのだむしろ。田園は  
 到る所こんなにも荒れているのに！ ほら、泣く泣く  
 僕は山羊を追い立て、そしてティテュルス、こいつを無理矢理引っぱっていく。  
 たった今あのハシバミの茂みで、あろうことか裸の岩の上に、  
 双子を、群の希望を、産み落としたばかりのこいつを。  
 思えばこの不運を、樫の木に落ちた雷が何度も  
 予告したはずなのに。何故それが僕にはわからなかったのか。  
 ティテュルス、でもその神とはいったいどんな？ ねえ。

TITYRVS

Vrbem quam dicunt Romam, Meliboeae, putau  
 stultus ego huic nostrae similem, quo saepe solemus 20  
 pastores ouium teneros depellere fetus.  
 Sic canibus catulos similis, sic matribus haedos  
 noram, sic paruis componere magna solebam.  
 Verum haec tantum alias inter caput extulit urbes  
 quantum lenta solent inter uiburna cupressi. 25

## ティテュルス

ローマと人が呼ぶ町を、メリボエウス、おろかにも  
 僕は、仲間たちがいとけない羊をいつも連れていく、  
 あの田舎町のようなものと思っていた。  
 子犬は親犬に、子山羊は母親に似ているものだから、  
 大きな都もちっちゃな町とさほど変りはしないと思っていた。  
 でもローマは全ての町の上に頭をもたげている  
 しなやかなガマズミの間に糸杉が高くそびえているように。

## MELIBŌEVVS

Et quae tanta fuit Romam tibi causa uidendi?

## TITYRVVS

Libertas, quae sera tamen respexit inertem,  
 candidior postquam tondenti barba cadebat;  
 respexit tamen, et longo post tempore uenit,  
 postquam nos Amaryllis habet, Galatea reliquit. 30  
 Namque, fatebor enim, dum me Galatea tenebat,  
 nec spes libertatis erat, nec cura peculi.  
 Quamuis multa meis exiret uictima saeptis,  
 pinguis et ingratae premeretur caseus urbi,  
 non umquam grauis aere domum mihi dextra redibat. 35

## メリボエウス

で、どうしてそれほどまでにローマに行きたいと？

## ティテュルス

自由さ。それは遅まきながらこの能なしめにも眼をおとめ下さった。  
 そり落とすヒゲに白いものが目立つようになってからようやく、  
 僕を振り返り、長い時を経てやっとのことおいで下さった。  
 ガラテアが僕を棄て去り、アマリュリスと一緒にってからやっと。  
 まったく正直言って、ガラテアの尻にしかれていた時は、  
 自由の望みはなかったし、お金をためることもできなかった。  
 何度も囲いから子羊を連れ出したけれど、  
 脂あぶらののったチーズを、しみつたれの町のために搾ったけれど、  
 たんまりおかし硬貨を握って家路についたことなど一度もなかった。

## MELIBOEVS

Mirabar quid maesta deos, Amarylli, uocares,  
 cui pendere sua patereris in arbore poma:  
 Tityrus hinc aberat. Ipsae te, Tityre, pinus,  
 ipsi te fontes, ipsa haec arbusta uocabant.

## メリボエウス

変だと思っていたよ、アマリュリス、なぜ君が悲しそうに神々に祈っていたのか。

誰のためにリングを枝に残しておくのか。

ティテュルスがいなくなったのだ。松だって、

泉だって、この果樹園だって、ティテュルス、君を呼び求めている。

## TITYRVS

Quid facerem? Neque seruitio me exire licebat, 40

nec tam praesentis alibi cognoscere diuos.

Hic illum uidi iuuenem, Meliboee, quotannis

bis senos cui nostra dies altaria fumant.

Hic mihi responsum primus dedit ille petenti:

«Pascite, ut ante, boues, pueri; submittite tauros.» 45

## ティテュルス

どうすればよかったのだ？ 奴隷の身から脱することも、

これほどありがたい神様を見つけることも、よそでは無理だった。

このローマで僕は彼の若者を見た、メリボエウス、年々

月に一度、<sup>ひとたび</sup>彼の方のために僕の祭壇は煙を上げるのだ。

このローマで、彼の方は初めて僕の願いにお答え下さった。

「牛を飼え、以前のように、わが子等よ、牡牛を育てよ」

### MELIBOEVS

Fortunate senex, ergo tua rura manebunt!

Et tibi magna satis, quamuis lapis omnia nudus

limosoque palus obducatur pascula iunco;

non insueta grauis temptabunt pabula fetas,

nec mala uicini pecoris contagia laedent. 50

Fortunate senex, hic inter flumina nota

et fontis sacros frigus captabis opacum.

Hinc tibi, quae semper, uicino ab limite saepes

Hyblaeis apibus florem depasta salicti

saepe leui somnum suadebit inire susurro; 55

hinc alta sub rupe canet frondator ad auras;

nec tamen interea raucae, tua cura, palumbes,

nec gemere aëria cessabit turtur ab ulmo.

### メリボエウス

幸せな老人よ、君の土地は手つかず残るだろう！

君にはそれで十分だ、たとえむきだしの石や

泥に汚れたイグサの沼で一面<sup>まきば</sup>牧場がおおわれているとも。

見知らぬ草が仔をはらんだ羊をまどわすこともなく、  
 隣の群から悪い病をうつされることもなかりう。  
 幸せな老人よ、君はこの慣れ親しんだ川の流れと、  
 聖なる泉に、涼しい木陰を求めることだろう。  
 ヒュブラの蜜蜂が花の蜜を集める境界の柳の生垣は、  
 いつものようにかすかなざわめきで  
 君を眠りへと誘<sup>いざな</sup>うことだろう。  
 切立ったあの岩場の下で、枝打ち職人がそよ風に向かって歌うだろう。  
 けれど変わらず、君の大好きなジュズカケバトはしわがれ声をあげ、  
 高くそびえた<sup>じれ</sup>楡の木からは、ナゲキバトがいつまでも鳴きやまないだろう。

## TITYRVS

Ante leues ergo pascentur in aethere cerui,  
 et freta destituent nudos in litore piscis,                   60  
 ante pererratis amborum finibus exsul  
 aut Ararim Parthus bibet aut Germania Tigrim,  
 quam nostro illius labatur pectore uoltus.

## ティテュルス

軽やかな鹿たちが空中で草を食み、  
 潮<sup>うしお</sup>が浜に裸の魚を置き去りにするまでは、  
 故郷<sup>ふるさと</sup>を追われた者がたがいの国をとりかえ、

パルティア人がアラルの、<sup>ひと</sup>ゲルマニア人がティグリスの水を飲むまでは、  
彼の方の面影が僕の胸から消えることはない。

## MELIBOEVVS

At nos hinc alii sitientis ibimus Afros,  
pars Scythiam et rapidum cretae uenimus Oaxen 65  
et penitus toto diuisos orbe Britannos.

En unquam patrios longo post tempore finis,  
pauperis et tuguri congestum caespite culmen,  
post aliquot, mea regna uidens, mirabor aristas?

Impius haec tam culta noualia miles habebit? 70

Barbarus has segetes? En quo discordia ciuis  
produxit miseros! His nos consequimur agros!

Insere nunc, Meliboe, puros, pone ordine uitis!

Ite meae, felix quondam pecus, ite, capellae:  
non ego uos posthac, uiridi proiectus in antro. 75

dumosa pendere procul de rupe uidebo;  
carmina nulla canam; non, me pascente, capellae,  
florentem cytisum et salices carpetis amaras.

## メリボエウス

けれどぼくらは遠く、ある者は渴きにあえぐアフリカ人のもとへ、

ある者はスキュティアに、また白亜の急流オアクセスに、  
 あるいははるか地の果ブリタニアへと至るだろう。  
 ああいつか再び、長い年月ののち故里を、  
 つましいわが家の草ぶき屋根を<sup>まご</sup>眼にし、  
 わが王国に今一度まみえて、数本の麦の穂に驚く日は来るのだろうか？  
 このよく耕した土地が神をも恐れぬ兵士のものに？  
 この畑が野蛮人の手に？ ああ、これが不幸な民に  
 内乱のもたらしたのか！ やつらのためにぼくらは種をまいたのか！  
 さあメリボエウス、梨を接木せよ、まっすぐに葡萄の苗を植えろ！  
 山羊たちよ、さあ進め。行け、かつては幸せだったわが群よ。  
 もはやこの先再び、緑の洞窟に寝そべりながら遠く、  
 イバラの崖にすがりついたお前たちを眺めることはないだろう。  
 僕はもう歌はない。山羊たちよ、もはや僕に導かれてお前たちは、  
 花の咲いた<sup>うまごやし</sup>首蓆も苦い柳も食べることはないだろう。

## TITYRVS

Hic tamen hanc mecum poteras requiescere noctem  
 fronde super uiridi. Sunt nobis mitia poma, 80  
 castaneae molles et pressi copia lactis;  
 et iam summa procul uillarum culmina fumant,  
 maioresque cadunt altis de montibus umbrae.

## ティテュルス

せめて今夜はここで僕と共に、緑の木の葉の上で  
 休んでゆけばよかったのだ。熟れた果物もある、  
 やわらかい栗も、搾りたてのチーズだってたっぷりと。  
 ほら、向こうの農家の屋根からはもう夕餉の煙が立ち始めたし、  
 高い山から落ちる日影がだんだん大きく伸びてきた。

## 注

1 (行目) **Tityre**: 第九歌とともに最も自伝的な作品とされる第一歌に、一旦は土地没収の憂き目を見ながら、最終的にオクタウィアヌスの取りなしによって土地を取戻したウェルギリウス自身の痛切な体験が強く反映されていることはいうまでもない。しかしティテュルス=ウェルギリウスでは断じてない。単に年齢だけを見ても、ヒゲに白いものが目立ち、老人と呼ばれるティテュルスに対し、『牧歌』制作時の詩人は30前後の青年。また彼は決して解放奴隷ではない。土地没収事件、マントヴァ、ローマへの嘆願等自伝的要素を混在させながら、作者はティテュルスをことさら素朴な、さほど教養もない純朴な牧人に仕立てあげているようにみえる。とはいえ牧歌第一の劈頭にすえたこのティテュルスという名には特別の愛着があったのであろう。例えば第六歌の序の部分(4~5)で、アポロンは詩人に向かって「ティテュルスよ、羊飼いは羊を肥らせ、歌はつましいものでなくてはいけない」*Pastorem, Tityre, pinguis pascere oportet ouis, deductum dicere carmen* と忠告する。その他第三(20, 96), 五(12), 八(55), 九(23, 24)歌でティテュルスは、端役的な牧人と

して登場する。すなわち牧歌全10篇のうち6篇でティテュルスの名に言及されるのである。

**sub tegmine fagi:** 「ブナのおおいの下」ではいささか重苦しいので「ブナの木陰」と訳した。動詞 *tego* (通例により直説法現在一人称単数形をもって不定形に代える) に由来する *tegmen* (*tegimen*, *tegumen*) は、衣服、<sup>よろい</sup> 鎧、<sup>かぶと</sup> 甲、屋根等広く体や事物をおおい、保護するもの。cf. 『アエネーイス』Ⅲ, 594 「トゲで留めた服」 *consertum tegmen spinis*

2 **siluestrem:** 牧人たちは夏の暑い季節、涼を求めて家畜の群を森の中に連れていった。

**meditaris:** 「練習する、実行する」という意もあわせ持つが故に「奏でる」と訳したが、*meditor* は本来「考える、思いをこらす、沈思黙考する」の意。

**auena:** 詩を歌うに先立ち、あるいは詩の合い間に吹いた素朴な笛(穀物等の茎でできた野笛、牧笛、草笛)。ウェルギリウスの田園詩に欠かせない大切な小道具で、*cicuta*, *calamus*, *fisutula*, *harundo*, *tibia* 等と様々な名称で呼ばれながら第四、九歌を除く他の8篇でくり返し言及される。本訳では *tenuis auena* を「か細い葦笛」としたが、参考までにいくつかの諸訳をあげると、まず仏訳では *mince pipeau*<sup>2</sup>, *frêle pipeau*<sup>3</sup>, *léger pipeau*<sup>4</sup>, *mince chalumeau*<sup>5</sup>、有名なヴァレリー訳は単に *flûte*<sup>6</sup>。英訳 *slender reed*<sup>7</sup>, *slender oat*<sup>8</sup>, *light shepherd's pipe*<sup>9</sup>, *thine oaten straw*<sup>10</sup>、伊訳 *sottile zampogna*<sup>11</sup>, *umile zampogna*<sup>12</sup>, *esile flauto*<sup>13</sup>, *sottile canna*<sup>14</sup>, *umile flauto*<sup>15</sup>、独訳 *einfache Flöte des Hirten*<sup>16</sup>, *schmächtiger Halm*<sup>17</sup>, *kleine Flöte*<sup>18</sup>。総じて *auena* の訳は「笛、麦笛、葦笛」の3つに大別できそうだ。また *tenuis* の解釈では、少数ながらこれを「粗末な、慎ましい、見すばらしい」といった卑下、謙遜の意を含むとするものもある。

1～2 **Tityre, tu patulae recubans sub tegmine fagi / siluestrem tenui musam meditaris auena:** 木陰や草むらにくつろいで笛を吹き、歌を歌うのは典型的な

牧歌的情景。クルチウスはこのくだりを、そこから後世無数の子孫が生まれた「牧歌的な横臥のモチーフ<sup>19</sup>」の源とし、ウエルギリウス自身によるバリエーションとして、第三(55~58)、五(1~6)歌を引用している。「ウエルギリウスは翻訳不可能だ。何故なら音楽は翻訳できないからだ」とはヴォルテールの言であるが<sup>8</sup>、この1~2行のまさしく音楽的ともいえる美しさは類を見ない。ただただしく笛を吹き始めたかのように連なる冒頭のいく分硬い歯音〈t〉は、やがて2行目に移って、やわらかくやさしい鼻音〈m〉と混じり合い、流麗な旋律を奏でる。

3 **nos**: 1行目の tu「君」と対照させて nos「ぼくら」。nos patriae.../ nos patriam... と3, 4行目の冒頭の反復は, 1, 4行目の Tityre, tu.../ tu, Titire の反復と明確な交錯配列 chiasme (ABBA) をとり対立が強く浮彫りにされる。のんびりと田園の閑暇を享受するティテュルスと、一方土地を奪われて故郷を去るメリボエウス。

4 **fugimus**: 動詞 fugio は単に「逃げる, のがれる」だけでなく、ギリシャ語の φεύγω のように受身的な「追い払われる, 放逐される」の意も併せ持つ<sup>20</sup>。

**lentus in umbra**: 1行目の recubans sub tegmine patulae fagi を要約し言葉を変えて lentus in umbra, これをさらに抽象化して次々行に otia「閑暇」と総括する。この umbra「影」と共に始まった第一歌はやはり影 maiores umbrae (83, 最終行) と共に幕を閉じることになる。

4~5 **tu.../ formosam resonare doces Amaryllida siluas**: わかりやすく語順を変えれば, Tu doces siluas resonare formosam Amaryllida. 不定形 resonare の主語はもちろん siluas で, formosam Amaryllida はその直接目的語。擬人化された「森」silua, 牧歌的世界では自然もまたあたかも精神をもつかのように人間と交流する。

**Amaryllida**: Tityrus 同様 Amaryllis の名もテオクリトスからの借用。その他

Corydon, Daphnis, Galatea, Menalca 等々『牧歌』のほとんどすべての人物はその名を前3世紀のシチリアの詩人に負う。アマリュリスは、第一歌では、心根のやさしい、美しくまた家庭的な女性として理想的に描かれている。しかし第二歌(14, 52)や三(81)で言及される彼女は怒り易いわがままな女。他に八(77, 78, 101), 九(22)にアマリュリスの名。

6 **Meliboe:** Meliboeus の名はそのギリシャ語風 (*μέλω* 世話をする, *βοῦς* 牛) にもかかわらず、ウェルギリウスの創作と考えられる。メリボエウスは他に、三(1), 五(87), 七(9)に姿を見せる。『牧歌』10篇中 Tityrus は6篇に, Amaryllis は5篇に, Meliboeus は4篇に, さらに30行目の Galatea も4篇にといった具合に, ウェルギリウスは, 性格・役柄等の微妙にまた時にはかなりかけ違った諸人物に同一名を冠してくり返し登場させる。これは『牧歌』の多様でしかも同質的な世界を形成するにあずかって大いに力がある。

**deus:** オクタウィアヌス(63B.C.~A.D.14)を暗示する。しかし彼がアウグストゥス Augustus の称号を与えられて公式に神格化されるのは、第一歌制作時より10数年後の前27年。とはいえユリウス・カエサル(100B.C.~44B.C.)が死後神と認められた前42年1月1日以来、養子であるオクタウィアヌスは「神の子」*divi filius* になったといえよう<sup>21</sup>。

7 **ille... illius... ille (9):** 3度くり返し強調される *ille*。三人称の指示代名詞 *ille* は時に誇張的な価値 *valeur emphatique* を持ち、名高いもの、普通でないものを指し示す。例えば、*ille* Homerus 「彼の(有名な)ホメロス」、*Sapiens ille* Socrates 「彼の(名高き)賢者ソクラテス」

8 **imbuet:** もちろん *imbuet sanguine*, いけにえの血を注ぐということ。

9~10 **Ille meas errare boues,... et ipsum / Ludere quae uellem calamo permisit agresti:** 語順をわかりやすく変れば, *Ille permisit meas boues errare et ipsum ludere quae uellem calamo agresti. ipsum = me ipsum, quae uellem = cantus quos*

uellem

11 **mgis: potius** 「むしろ」

12 **Usque: adeo**を強調する。

**turbatur:** 非人称動詞として用いられたラテン語の3人称単数の受動態は行為そのものを強く浮彫りにし、強い表現力を持つ。とりわけそれは一語で言い切る形、すなわち現在形、未完了過去形等においてインパクトがある。例えば *curro* 走る、を例にとれば、*curritur* (on court, man runs など近代語では主語を添えざるをえないために行為自体の力は幾分そがれる)、*currebatur* は、複合形の完了 *cursum est* や過去完了 *cursum erat* より一段と強い表現力を持つ。

13 **aeger:** 病といっても、精神的な心痛をより強く意味するのであろう。いくつか訳例をあげれば、*dolent*<sup>22</sup>, *tout triste*<sup>23</sup>, *heart-sick*<sup>24</sup>, *esausto*<sup>25</sup>, *affranto*<sup>26</sup>, *krank im Herzen*<sup>27</sup>

**ago...duco:** メリボエウスは山羊の群を背後からせきたてて前へ *protinus* と歩ませるが、出産したばかりの一匹は綱をつけてやっとの思いで引っぱって行く。*protinus aeger ago; hanc etiam uix, Tityre, duco.* と3度も句点で区切りながらプツリプツリと短い語をつらねたこの13行目は、あえぎあえぎ、よろよろと進んで行く感じを音韻面からも巧みに表している。

15 **spem gregis:** 子供は将来の繁栄の夢を託す希望 *spes* である。『農耕詩』Ⅲ, 473 でも家畜の子は *spes* と呼ばれ、また蜜蜂をテーマとした第4巻 (162) では働き蜂たちを *spes gentis* 「一族の希望」と表現する。なおセルウィウスは、*spes gregis* である *gemellus* 「双子」はオスとメスであったと注している<sup>28</sup>。

**silice in nuda:** 通常は草などを手厚く敷いて出産するのに、旅の途中で、しかもあろうことかむきだしの裸の岩の上に生み落とされた子はすぐに死んだのであろう。双子であっただけに嘆きはより深かったと思える。

**conixa:** 能相欠如動詞いわゆるデポネント *conitor* 「努力する、きばる」の完

了分詞。

16～17 *Saepe malum hoc nobis... / de caelo tactas memini praedicere quercus:*  
語順を変えれば *Memini quercus tactas de caelo praedicere saepe nobis hoc malum.*

16 *laeua:* 右(手)を示す形容詞 *dexter* が、器用な、幸福な、好都合などといった意を含むのに対し、左(手)のを示す *laevis* は、へたな、愚かな、不幸な等を含意とする。この事情は、*droit / gauche, right / left, destro / sinistro, recht / link* においてもほぼ同様。

17 *de caelo tactas:* 古代人は樹木への落雷を災難の予告と見なした。例えばオリーブの木への落雷は不毛・不作を、樅の木へのそれは追放を意味した<sup>29</sup>。

18 *iste:* ティテュルスがややのほぜせあがって *ille* を連発するのに対し、メリポエウスの少し距離を置いた、冷静な感じのこの冷静な *iste* はなかなか面白く効果的である。

*qui:* 疑問代名詞 *quis* 「誰」ではなく、疑問形容詞 *qui* 「どのような」。

*da=dic*

19～21 *Urbem quam dicunt Romam... putavi / stultus ego huic nostrae similem, quo saepe solemus / pastores ouium teneros depellere fetus:* *Ego stultus putavi urbem quam dicunt Romam similem huic nostrae (urbi), quo saepe (nos) pastores solemus depellere teneros fetus ouium.*

20 *huic nostrae:* ウェルギリウスの故郷 *Andes* にほど近い *Mantua* (マントゥア、現在の *Mantova* マントヴァ) の町を指す。第一歌では明示されないが、同じ土地没収事件をテーマとする九歌ではマントゥアの名は2度くり返される(27, 28)。この箇所「田舎町」と訳したが、ほとんどが *semblable à la nôtre*<sup>30</sup>, *like this of ours*<sup>31</sup>, *simile alla nostra*<sup>32</sup> 等直訳であるのに対しレクラム版の独訳のみ *unser Landstädtchen*<sup>33</sup> としている。

21 **depellere**: unus de multis, nemo de iis など前置詞 de に全体からの部分の分離、の意があるのをくみ、Budé 版はこのくだりを mener les petits enlevés à nos brebis と訳している。同様に Gaffiot 辞典では solemus ouium depellere fetus を nous avons l'habitude de mener les rejetons de nos brebis [en les séparant du troupeau] と解説している。一方 deicere se de muro, arbor de caelo tacta のようにこの de を上から下への動きに係わる前置詞として解釈することもできる。Benoist はアンデスは高台にあり、マントゥアへは下り道になると注し<sup>34</sup>、Langenscheidts Großes Schulwörterbuch は depello の項に hinabtreiben [ovium fetus Mantuum] とする。J. H. Voß 訳をあげれば、Zu welcher (マントゥア) wir Hirten zarte Kinder der Schafe hinabzutreiben gewohnt sind<sup>35</sup>。

22 **noram**=noveram

24～25 **Verum haec tantum alius inter caput extulit urbes / quantum lenta solent inter uiburna cupressi**: Verum haec (urbs) tantum extulit caput inter alias urbes, quantum cupressi solent (extollere caput) inter lenta uiburna.

24 **extulit**: このような場合われわれなら普通 extollet と現在形と用いるところを、ラテン語は完了形に置く。現在の状態よりも、その現在を結果としてもたらした過去をより重視する。Rome est grande parce qu'elle a grandi<sup>36</sup>。

25 **uiburna**: Oxford Latin Dictionary (以下 O.L.D.) によれば uiburnum は a shrub, either the wayfaring tree (スイカズラ科ガマズミ属の低木) or the guelder rose (てまりかんぱく)。諸訳は「ガマズミ」と「柳」の二系統に大きく別れるようだ。lenta uiburna の訳例をいくつかあげると、まず「ガマズミ」系は、vivornes flexibles<sup>37</sup>、ヴァレリーは単に vivornes<sup>38</sup>, molli viburni<sup>39</sup>, dolci viburni<sup>40</sup> 等々、「柳」の方は bending osiers<sup>41</sup>, niederer Weidengebüsch<sup>42</sup> 等。この二者以外は、bruyère<sup>43</sup>, drooping undergrowth<sup>44</sup> 等。lentus は「柔軟

な、しなやかな、曲げ易い」の意だが、「(ローマに向かって) なびく、頭をたれる、お辞儀をする」といった含意があるのだろう。

25 **solent**: 19~25に *solemus* (20), *solebam* (23)と動詞 *soleo* が3度もくり返され、いささかうるさい感じがしないではない。Perret はティテュルスに比べてメリボエウスの言葉の方がより *châtié* (練られた) されているとするが<sup>45</sup>, この少々無造作な *soleo* の反復も田舎者ティテュルスの純朴さの表現であろうか。

26 **Et**: ティテュルスのもってまわったローマ賛美に対するいらだちを示して。

27 **Libertas**: 擬人化された自由の女神。ローマのアウエンティウスの丘には自由の女神の神殿があった<sup>46</sup>。

**inertem**: Gaffiot によれば *iners* は *in + ars*, すなわち *étranger à tout art, sans capacité, sans talent, sans activité, sans énergie*. 自由を買い取るためにお金をためるのに熱心ではなかったティテュルスを、また派手好きなガラテアのせいで貯蓄どころではなかった彼を *iners* と言っている。

28 **tondenti**: *tondeo* の現在分詞 *tondens* の与格。(mih) *tondenti* 「ヒゲを剃る私の手元に」

**cadebat**: ヒゲ剃りは当然くり返し行なわれたが故に未完了過去、対して *respexit* (27, 29), *uenit* (29) は点行為を示して完了過去。

30 **habet**: 今なおアマリュリスと暮らしているが故に現在形。

**Galatea**: ガラテアはここでは派手好きのわがままな田舎娘。他にガラテアは第三歌でいたずらっぽい小娘の役で (64, 72), また七 (37) 九 (37) では海のニンフとして登場する。セルウィウスはガラテアがマントゥアを、アマリュリスがローマを諷しているとするがいかなものか<sup>47</sup>。

32 **cura peculi**: 自由を購うためにこつこつと小銭を貯めること。*pecus* (女性名詞として「家畜, 羊」中性名詞で「家畜とりわけ羊の群」) に由来する

*peculium* は元来主人が奴隷に分かち与えた家畜等を意味したが、そこから派生して「奴隷が貯めた個人財産」の意を持つ。

33 ~ 35 *Quamuis multa meis exiret uictima saeptis, / pinguis et ingratae premeretur caseus urbi, / non umquam grauis aere domum mihi dextra redibat.:*

*Quamuis multa uictima exiret meis saeptis, et pinguis caesus premeretur ingratae urbi, non umquam mihi dextra grauis aere redibat domum.*

33 *uictima*: 21行目の *teneros fetus* と同一物を示すと考えあえて「子羊」とした。諸訳は多く文字通り「犠牲」と訳しているが、中にある H. des Abbayes のみは拙訳と同じく *agneau*<sup>48</sup> と、また H. C. Schur は *Opferlamm*<sup>49</sup> とする。

34 *pinguis*: セルウィウスは *pinguis* は *caseus* よりもむしろ *uictima* にかかるとする。

*ingratae urbi*: 目的を示す与格 (*dativus finalis*)、マントゥアのこと。町が *ingratus* とは中々面白い表現だが、期待通りの値で子羊やチーズを買ってもらえないのでこのように言ったのだろう。いくつか訳例をあげれば、*pour la ville plutôt chiche*<sup>50</sup>, *pour cette ville ingrate*<sup>51</sup>, *for the thankless town*<sup>52</sup>, *per l'avaria città*<sup>53</sup>, これは随分はっきりしているが *per la città che si sfrutta*<sup>54</sup> (搾取する町のために)

36 ~ 37 *Mirabar quid maesta deos, Amarylli, uocares, / cui pendere sua patereris in arbore poma:* *Mirabar quid* (何故) *Amarylli, maesta, uocares deos, cui patereris* (*pator* の接続法半過去) *poma in sua arbore.*

37 *cui*: 誰のために、利害関係の与格 (*dativus commodi aut incommodi*)

*poma*: *pomum* は O. L. D. によれば果実、とりわけ果樹園の果実とある。拙訳ではイメージの明快を優先して「リンゴ」(80行目の *mitia poma* は「熟れた果実」と訳した) としたが、諸訳も果実とリンゴの2つに大別できる。

**cui pendere sua patereris in arbore poma:** Perret は 3 通りの解釈の可能性を示唆する 1) ローマから戻ったティテュルスがすみ取って食べるように 2) ティテュルスがいなくなった悲しみの余り、アマリュリスは果実をつみ取る元気もなかったので 3) 祈願する神々に供するために<sup>55</sup>。

38~39 **Tityrus hinc aberat. Ipsae te, Tityre, pinus, / ipsi te fontes, ipsa haec arbusta uocabant:** Tityrus, Tityre と二度呼ばれるティテュルス。ipsae te, ipsi te, ipsa haec と 3 度くり返される ipse。自然もまた魂あるものごとく、アマリュリスと悲しみを分かちあい、共に不在のティテュルスに呼びかける。この 2 行、リズム・音韻と意味の両者があいまって切迫した美しい抒情を示す。

39 **arbusta:** Gaffiot によれば、plantation, lieu planté d'arbres

41 **praesentes:** praesens (praesum) は présent が本義だが、神々について言う場合は propice, favorable

alibi: もちろん「ローマ以外では」

42 **Hic...Hic(44):** 「ここで」、「ここ（ローマ）で」と、あたかも現に今ローマに居るかのごとき感慨をこめて二度文頭でくり返す。

**illum...iuuenem:** オクタウィアヌスは当時まだ 25 歳にも満たなかった。敬恭の念をこめてティテュルスは Hic illum (42), Hic...ille (44) とくり返す。

43 **bis senos...dies:** 月に一度、年に 12 回。ローマ人は毎月一回、ラレス Lar, Lares (家庭の守護神、先祖の<sup>いけにえ</sup>霊) に犠牲を捧げた。

45 **pueri:** puer 「子供」はまた、奴隷、召使いの意でも用いられる。

46 **Fortunate senex, ergo tua rura manebunt!:** 詩はここから後半部分に移る。meditaris (2) と現在形で始まった前半がティテュルスの体験を語って過去時称を主としてきたのに対し、未来形 manebunt を皮切りとする後半は一転して、obducat (48), temptabunt (49), laedent (50), captabis (52) 等々未来時称を軸とし、結末はまた現在形で終る。さて「幸せな老人よ」と呼びかけて始まるメリボエ

ウスの46～58行は、ウェルギリウスの詩の中でも、あるいは少々大仰に言えば古今東西の詩文をとっても、最も高揚した抒情歌の一つ、最も美しい韻文の一つではなかろうかとひそかに思っている。

**tua:** tua を所有形容詞ではなく、所有代名詞と解する訳も多い。例えば Bndé 版で *tes champs te resteront*<sup>56</sup> とあるのに対し、R. Coleman は *tua is predicative: 'so the land will remain yours'*. と注釈している<sup>57</sup>。

47～48 **quamuis lapis omnia nudus / limosoque palus obducat pascua iunco:** やや解釈の分かれるところである (A) *quamuis lapis nudus limosoque junco palus* (ここまでを主語の部分とする) *obducat omnia pascua.*

(B) *quamuis omnia (est) lapis nudus, limosoque junco palus obducat pascua.* 例えば M. Rat の *quoique des pierres nues et un marécage aux joncs limoneux couvrent tous ces pacages*<sup>58</sup> や M. Geymonat の *anche se la nuda pietra et la palude col giunco limaccioso ricoprono tutti i pascoli*<sup>59</sup> はAの立場をとる。対して Budé 版の *bien que la pierre à nu affleure partout et qu'un marécage borde les près de jonc limoneux*<sup>60</sup> やまた Loeb 版の *though bare stones cover all, and the marsh chokes your pastures with slimy rushes*<sup>61</sup> はほぼBのように解して訳している。なおこの個所はミンキウス Mincius 川(現在のミンチオ Mincio)に接する湿地帯にあったウエルギリウス自身の土地を描写しているのであろう。

49 **grauis...fetas:** 仔をはらんだ羊や山羊のこと。ただし *grauis* を「疲れきった、衰弱した」の意とする者も少々ある。M. Geymonat の *le madre sfinite*<sup>62</sup> あるいは J. H. Voß の *die schwächlichen Mütter*<sup>63</sup>

49～50 **non insueta...pabula.../ nec mala...contagia:** *non, nec* と否定辞を冠して強調するが、この否定をはずせばそれはそのままメリポエウスの山羊の群が会うであろう危険であり、苛酷な運命である。

52 **fontis sacros:** 泉はニンフの住処、それ故 *sacer*

53~55 **Hinc tibi, quae semper, uicino ab limite saepes / Hyblaeis apibus florem depasta salicti / saepe leui somnum suadebit inire susurro:** 少々構文が複雑である。試みに書き直せば、Hinc uicino ab limite, saepes salicti depasta apibus florem, quae semper (suasit), suadebit saepe leui susurro tibi inire somnum. saepes salicti (柳の生垣)が主語で、動詞は suadebit (誘うだろう)、目的語が tibi inire somnum (君が眠りに入るのを)。depasta は depasco の完了分詞で saepes にかかり、florem は関係を示すギリシャ語的用法の対格——花において、花に關して蜜を集める。

54 **Hyblaeis apibus:** Hybla 山はシシリア島の名高い蜂蜜の産地。もっともここでは hyblaeus は単なる文飾で、枕詞のようなもの。

**salicti:** 柳 salictum がしばしば生垣となり、そこに蜜蜂が訪れたことは『農耕詩』 II 434~436にも記されている。Quid maiora sequar? Salices humilesque genistae, / aut illae pecori frondem aut pastoribus umbram / sufficiunt saepemque satis et pabula melli. 「どうして大きな木のことばかり言うのか。柳や丈の低いエニシダだって、家畜に葉を、牧人に蔭を与え、畑の生垣や蜜蜂の食物となるのに」。Benoist は湿地にあったウエルギリウスの土地は柳の生育に適していたと注している<sup>64</sup>。

55 **leui... susurro:** 蜜蜂の羽音と木の葉のそよぐかすかな音。

**saepe leui somnum suadebit inire susurro:** s の alliteration 頭韻法が、昼下がりの眠気を誘うようなかすかな羽音と木の葉のさやぎをやさしく表現して実に美しい。

56 **frondator:** セルウィウスは3種類の frondator を列挙する。(A) 剪定 (枝打ち) する者 (B) 冬に備えて家畜のエサとなる葉を刈り取る者 (C) 日当たりをよくするためにブドウの葉をちぎり取る者<sup>65</sup>。M. Geymonat はこれを野鳥、おそらくは merlo (ツグミ) とする解釈にも魅力を感じるとする<sup>66</sup>。

57 **tamen interea: frondator** の歌にもかかわらず、鳥はいっこうに恐れる風もなく、むしろ人声に和するように鳴きつづける。人と自然との親密、交流。

**tua cura: deliciae tuae** つまり *objet de ton amour, your pets*. 第十歌 (22) では *tua cura Lycoris* 「君の恋人のリュコリス」と歌う。

**palumbes:** O. L. D. によれば *wood pigeon, ringdove* (モリバト、ジュズカケバト)

58 **aeria: aeries (aer)** はここでは空高くそびえた *reaching high in to the air* の意。cf. 『農耕詩』Ⅲ, 474 *aeris Alpis* 「空高くそびえるアルプス」, 『アエネアス』Ⅲ, 680 *aeriae quercus* (櫟)

**turtur:** *turtle-dove* (コキジバト、ナゲキバト)

57~58 **nec tamen interea raucae, tua cura, palumbes, / nec gemere aeria cessabit turtur ab ulmo:** ニレの木で鳴いているのは (A) *palumbes* と *turtur* の両者なのか、それとも (B) *turtur* のみなのか、少々あいまいである。例えば M. Rat の *Sans pourtant que les roucoulantes palombes, objet de tes soins, ni que la tourterelle cessent de gémir au sommet de l'ormeau*<sup>67</sup>. や Loeb 版の *while still the couing wood-pigeons, your pets, and the turtle-dove shall cease not their moaning from the skyey elm*<sup>68</sup>. などは明確に (A) である。一方 H. des Abbayes の *Tes palombes aimées roucouleront sans cesse et du plus haut rameau la tourterelle encor gémira dans l'ormeau*<sup>69</sup>. は明らかに (B) だし、レクラム版の *und es gurren beständig die Tauben, die du so lieb hast, Turteltauben auch schluchzen ihr Lied in luftiger Ulme*<sup>70</sup>. もどちらかといえば (B) だろう。なおこの2行は、子音 r (7回) と t (6回) と母音 a (11回) u (7回) の反復が、のどかでしかもちょっぴり悲しげなハトの鳴き声を写して印象深い。

59~62 : あり得ないこと、不可能なことを並びたてるギリシャ以来の修辞法

adynaton アデュナトン。ウェルギリウスはしばしばこの手を用いるがその一例をあげれば、第八歌（27～28）に、Iungentur iam grypes equis, aevoque sequenti / cum canibus timidi uenient ad pocula damnae. 「ハゲタカが馬と交わり、やがて臆病なカモシカが犬と連れだって水飲み場に来るだろう」

60 **freta destituent nudos in litore piscis:** nudos は destituent の直接目的語 piscis の、仏文法でいうところの attribut 「属詞」と見なすべきだろう。Ce vers signifie que les poissons, cessant d'être enveloppés par l'eau (*mud*), vivront sur le rivage. (Benoist<sup>71</sup>)

62 **aut Ararim Parthus bibet aut Germania tigrim:** Partia パルティアはカスピ海の南にあった西アジアの国。Arar(現在の Saône ソーヌ)アラル川は正確を期せばゲルマニアではなくガリアの川。しかしアラルが西方を、ティグリスが東方をそれぞれ喚起すれば十分なのだろう。さて少し横道にそれるが、リヨン市をゆったりと縦断するソーヌ川は訳注者にとっても、実になつかしい川である故、『ガリア戦記』から、アラル川に関して印象的な描写を引用しておきたい。Flumen est Arar, quod per fines Haeduorum et Sequanorum in Rhodanum influit, incredibili lenitate, ita ut oculis in utram partem fluat iudicari non possit. (I-12) 「アラル川はハエドゥイ族とセクアニ族の領地を流れてロダヌス川に注ぐ。その流れは信じられないほどゆるやかで、眼でみただけではどちらにながれているのか分からないほどだ」

64 **At nos hinc...**: ティテュルスの素朴な adynaton を受けて、at nos 「しかし我々は」ゲルマニアやパルティアよりもさらに遠く、地の果てまでも逃れていくのだと、メリボエウスは絶望の余り嘆いてみせる。

66 **Scythiam:** Scythia スキュティアは黒海の北方にあった遊牧民の国。

**rapidum cretae:** qui entraîne de la craie<sup>72</sup>, snatching up chalk as it goes<sup>73</sup> などお cretae を「クレタ島の」と解する者もある。

**Oaxen:** M. Geymonat は、Oaxes はおそらく中央アジアの大河 Oxus であろうとし、東西南北の地の果をオアクセス、ブリタニア、アフリカ、スキュティアでそれぞれ代表させたのだらうと言う<sup>74</sup>。

67 ~ 69 *En unquam patrios longo post tempore finis, / pauperis et tuguri congestum caespite culmen, / post aliquot, mea regna uidens, mirabor aristas?*  
 post は2つとも前置詞ではなく、副詞 (=postea) と解するべきだろう。En unquam, videns post longe tempore patrios fines et culmen congestum caespite pauperis tuguri, mea regina, mirabor (post) aliquot aristas? mea regina 「わが王国」は patrii fines 「父祖の地」と pauper tugurium 「粗末な家」の同格。

73 *Inserere nunc, Meliboeae, pios, pone ordine uitis!* 今はもはやなしても無駄なことを、甲斐ないことを、自嘲の思いをこめて、自らにあえて命じる。64~78行のメリボエウスの語りは、彼の心の混乱、不安、高揚、絶望を表して、疑問文、感嘆文、命令文等さまざまな叙述法がめぐるましく交錯する。

75~78 *non ego... / carmina nulla... / non...* 牧歌的世界への決別を、帰らぬ昔の幸福を、否定辞を3度くり返ししながら、パテティックにしかし実に美しいイメージで歌う。

75 *uiridi proiectus in antro:* 一行目の「ブナの木蔭に身を横たえたティテュルス」の、すなわち「牧歌的な横臥のモチーフ」のバリエーション。「緑の洞窟」とは、ピロードのように一面に苔の生えた洞窟のことであろうか。諸訳がほとんど、*allongé dans une grotte verdoyante*<sup>75</sup>, *stretched in some green cave*<sup>76</sup>, *sdraiato in una verda grotta*<sup>77</sup>, *in grünender Grotte mich streckend*<sup>78</sup> といったように直訳であるのに対し、唯一 Loeb 版のみ *stretched in some mossy grot*<sup>79</sup> とはっきり「苔」と言っている。失われた楽園の、もはや永久に過ぎ去った牧歌的世界の象徴としての「緑の洞窟」という美しいイメージは、訳注者にボードレールの詩 “MOESTA ET ERRABUNDA”<sup>80</sup> (悲シミサマヨフ女) を思い起

こさせる。このラテン語のタイトルを冠した詩で、19世紀のフランスの詩人は、*Comme vous êtes loin, paradis parfumé!* 「御身はなんと遠いのだろう、香り高い楽園よ!」とくり返し歌い、その *le vert paradis* 「緑の楽園」、*l'innocent paradis* 「無邪気な楽園」は、*Est-il déjà plus loin que l'Inde et que la Chine?* 「もうすでにインドよりもシナよりも遠いのか?」と嘆くのである。なおボードレールは同詩で海のことを、私達の労苦をなぐさめる *rauque chanteuse* 「しわがれ声の歌い手」と言っているが、『牧歌』第一歌56行目の *raucae, tua cura, palumbes* 「君の大好きなしわがれ声のジュズカケバト」と比べて大変面白い。

78 *florentem cytisum*: 第二歌64にも *florentem cytisum sequitur lasciva capella* 「陽気な山羊は花の咲いた<sup>うまこやし</sup>首箱を探し回る」とある。

79 *Hic tamen hanc mecum poteris requiescere noctem*: この個所の未完了過去 *poteris* は仏語なら条件法過去を用いるところだろう。例えば Budé 版では、*Ici, du moins, tu aurais pu te reposer avec moi*<sup>81</sup>; 同様に Loeb 版の英訳では *Yet this night you might have rested here with me*<sup>82</sup>.

80 *fronde super uiride*: メリポエウスの「緑の洞窟」を受けて、ティテュルスは「緑の木の葉の上で」と応じる。

81 *pressi...lactis*: *lac pressum* 「搾った乳」とは、*fromage frais* (フレッシュチーズ), *lait desséché*<sup>83</sup>

83 *maioresque cadunt altis de montibus umbrae*: 冒頭の *umbra* 「影」に照応して、第一歌は *umbrae* とやはり影をもって詩は閉じられる。しかし最初の単数形の *umbra* は枝を広げたブナの木が作るやさしく平和な日蔭であるのに対し、最後の複数形におかれた *umbrae* は、夜を告げ知らせて山から落ちてくる大きな影、夜の安らぎをもたらすかに見えて他方同時に、闇のもつ不吉な、不気味なイメージを内包した影でもある。夕暮れの訪れと共に第一歌は終了す

るのであるが、『牧歌』では他にやはり、第二、六、十歌で詩の結末と夕刻が一致し、第九歌でもまた夕べの間近いことを感じさせる。

#### 参考文献

- 1) E. Benoist, *Bucoliques et Géorgiques*, Hachette, Paris, 1884
- 2) A. Cartault, *Etude sur les Bucoliques de Virgile*, Armand Colin, Paris, 1897
- 3) F. Plessis et P. Lejay, *Oeuvres de Virgile*, Hachette, Paris, 1913
- 4) L. Herrmann, *Virgile, Bucoliques*, Latomus Vol. X, Bruxelles, 1952
- 5) P. Valéry, *Oeuvres I*, Gallimard, Paris, 1957
- 6) H. des Abbayes, *Virgile, Les Bucoliques*, Latomus vol. LXXXIV, Bruxelles, 1966
- 7) M. Rat, *Les Bucoliques, les géorgiques*, Flammarion, Paris, 1967
- 8) E. de Saint-Denis, *Virgile, Bucoliques*, Les belles lettres (Budé), Paris, 1967
- 9) J. Perret, *Virgile, Les Bucoliques*, Presses universitaires de France, Paris, 1970
- 10) J. P. Chausserie-Laprée, *Bucoliques*, La Différence, Paris, 1993
- 11) N. Cournot, *Virgile, Bucoliques I et IX*, Bertrand-Lacoste, Paris, 1994
- 12) H. R. Fairclough, *Virgil I*, Loeb classical library, 1916
- 13) T. S. Roysds, *Eclogues and Georgics*, Dent, London 1746
- 14) E. V. Rien, *Virgil, The pastoral poems*, Penguin Classics, 1954
- 15) R. Coleman, *Vergil, Eclogues*, Cambridge University Press, 1977
- 16) A. G. Lee, *Virgil, The Eclogues*, Penguin Classics, 1984
- 17) N. Horsfall, *A companion to the study of Virgil*, E. J. Brill, 1995
- 18) L. Canali, *Virgilio, Bucoliche*, Biblioteca Universale Rizzoli, Milano, 1978
- 19) M. Geymonat, *Bucoliche*, Garzanti, 1981
- 20) M. Cesson, *Virgilio, Bucolica-Bucoliche*, Mursia, Milano, 1986
- 21) M. Cavalli, *Virgilio, Bucoliche*, Mondadori, Milano, 1990
- 22) *Enciclopedia Virgiliana V\*\**, Enciclopedia Italiana, Roma, 1991
- 23) E. R. Curtius, *Europäische Litteratur und Lateinisches Mittelalter*, Francke Verlag, 1954 (『ヨーロッパ文学とラテン中世』, みすず書房, 1971)
- 24) T. Haecker, *Vergil, Hirtengedichte, Vater des Abendlandes*, Fisher-Böcherer, 1958
- 25) H. C. Schnur, *Vergil, Hirtengedichte*, Reclam, Stuttgart, 1968
- 26) *Die römische Literatur, Augusteische Zeit*, Reclam, Stuttgart, 1967
- 27) B. Kytzler, *Römische Lyrik*, Reclam, Stuttgart, 1994
- 28) *SERVII GRAMATICI qui feruntur in Vergilii Bucolica et Georgica*, Lipsiae in Aedibus B. G. Teubneri, 1927
- 29) 越智文雄, 『田園詩・農耕詩』生活社, 1947
- 30) 河津千代, 『牧歌・農耕詩』未来社, 1981
- 31) 中山恒夫, ウェルギリウスの『詩選』第一歌, 大阪大学言語文化研究, 9・10・11号, 1983~1985
- 32) 小川正廣, 『ウェルギリウス研究』京都大学学術出版会, 1994

## 補注

(1) alle lateinische Bildung mit der Lektüre der erster Ekloge begonnen, 参考文献23, P.197 (以下単に23—P.197と表記)

- (2) 8—P.38 (3) 6—P.13 (4) 7—P.33 (5) 4—P.18 (6) 5—P.225  
 (7) 12—P.3 (8) 16—P.31 (9) 14—P.21 (10) 13—P.7 (11) 22—P.121  
 (12) 19—P.3 (13) 18—P.55 (14) 21—P.5 (15) 20—P.27 (16) 25—P.3  
 (17) 27—P.75 (18) 26—P.23 (19) 23—P.198 (20) 3—P.3 (21) 19—P.3  
 (22) 8—P.38 (23) 5—P.225 (24) 12—P.3 (25) 21—P.5 (26) 18—P.57  
 (27) 25—P.3 (28) 28—P.7 (29) 1—P.6 (30) 8—P.39 (31) 12—P.5  
 (32) 20—P.29 (33) 25—P.3 (34) 1—P.7 (35) 27—P.77 (36) 3—P.4  
 (37) 8—P.39 (38) 5—P.226 (39) 18—P.57 (40) 21—P.5 (41) 12—P.5  
 (42) 25—P.4 (43) 6—P.13 (44) 14—P.23 (45) 9—P.19 (46) 3—P.4  
 (47) 28—P.7 (48) 6—P.15 (49) 25—P.4 (50) 8—P.39 (51) 7—P.34  
 (52) 12—P.5 (53) 18—P.59 (54) 22—P.122 (55) 9—P.22 (56) 8—P.40  
 (57) 15—P.82 (58) 7—P.35 (59) 19—P.45 (60) 8—P.40 (61) 12—P.7  
 (62) 19—P.45 (63) 27—P.79 (64) 1—P.10 (65) 28—P.13 (66) 19—P.44  
 (67) 7—P.35 (68) 12—P.7 (69) 6—P.17 (70) 25—P.5 (71) 1—P.11  
 (72) 3—P.7 (73) 15—P.81 (74) 19—P.10 (75) 8—P.41 (76) 16—P.35  
 (77) 18—P.63 (78) 25—P.6 (79) 12—P.9 (80) Baudelaire, *Œuvres complètes I*, Gallimard, 1975, P.63 訳は阿部良雄 (『ボードレール全集 I』筑摩書房, 1983) (81) 8—P.41  
 (82) 12—P.9 (83) 3—P.8